

## ● 海外飛び歩き

門倉輝子

ドイツ—デンマーク—ロンドン—

ドイツ

美しいチューリッヒからケルンを経てエッセンに。流石はドイツ!! ヒットラーの時代に作ったアウトバーン道路が、未だにこわれていないのだから本当に素晴らしい。道路の寿命が十五年から五十年とか——一番ひんばんな所を修理しているのを見たが、一米以上深く掘って完全に、コンクリートで固めて作っている。成程、これでは中々穴のあく筈がない。堅固なドイツの国民性の現れだろう。堅固など云えば、私が入ったレストラン、ビヤホールのテーブル、ナイフ、フォークもがっちりとしていて、何年も持ちそうなもの許りだった。

アヌガーで開かれている世界食品博覧会へ和服で行く事にした。会場に於いても日本の着物の人気は素晴らしい、パチパチとあちこちから写真を撮られるなどは、一寸した

スター並みである。相当、心臓の強い私も些か照れくさい。博覧会の内容も非常に豊富で、各国が各々の自国の雰囲気を手を盛り上げている。華やかなものもあれば、地味なものもあるが、皆、それぞれがその店の伝統を生かし、始めて見る私達にも何となく、その国の、その店の、感じを読み取る事が出来る。特に、包装関係や、その他、菓子、パン、器械の展示品、宣伝車等、興味深く広い会場をぎつしりと埋めつくして見応えがあった。この大掛りな博覧会は私に、晴海の国際見本市を思い出させた。市街戦の弾のあとも痛ましいドイツなのに、地の底から湧く様な活気が感じられる。

学問の都ハイデルベルヒ、夕日に輝くローレライにドライブする。八〇〇㎞も有る行程を、時速一六〇も出して車を走らせるその爽快な気分、しかも、日帰りが出来るなんて日本では想像もつかない。

ドイツと云えばビール。そのビールがとて安く、そしてちつともお腹に張らないのだから妙なもので有る。本場だけにドイツ料理は流石に美味しく、料理そのものにドイツの堅実さや、がっしりした感じが現われている。夜のレストランは、私の着て行った着物の為に、日本の音楽を奏じてくれる。

荒城の月、隅田川、と美しい音色をきき乍ら、うっとりとして遠い母国を偲び、同じ滝廉太郎の調べも、日本で

何となく聞いている時とうって変り、こうして外国のレストランで静かに耳を傾けているのでは、その感じの受け取り方に雲泥の差があった。

ハンブルグ迄は一と飛びに——ハンブルグの町を歩く、退しく育った手足の少年達が皮のズボンをはいて歩いているのを見掛ける。その伸び伸びとした肢体は、一寸、日本で見掛ける事の出事ない姿である。何と説明したら良いだろうか。言葉で云えば、健康的なとか、健全なとか、見事なとか、それ等の言葉が全部当てはまる、一つの何かガッシリとしたけなげさに、目を見張る思いがする。

ビヤホールも大掛りで、ビールは飲みながら腕を組みつつ、ビールの歌の合唱、或は、ダンスに興じ、ソーセイジを囁いたり、見ている方も楽しい位、心から楽しんで飲んでいる。大きな声で喚いたり、上役の悪口、同輩の悪口等、心のウップンばらしに酒を友としている日本人のお酒の飲み方、お酒の在り方に一寸、疑問を感じさせるものがあった。

そして、この半面、武骨な感じのドイツにも、エルベ湖畔に浮かぶヨットの柔かい美しさに、工業都市ドイツが一変して、あの穏やかなスイスにでも居る様な錯覚さえ覚える。有名なハーゲンベックの自然動物園は、余り広すぎて迷子になりそうな、驚くべき規模の大ききだった。ドイツに寄って一番印象に残ったのは、大戦争に於ける二度の敗

戦にもめげず、その都度こうして立派に、大地に足をしっかりと踏みしめて立ち直る姿に、ドイツ国民の優秀性と逞しさを充分感じる事が出来た。

デンマーク

ルフトファンザの飛行機でコペンハーゲンに飛ぶ。お伽話のお国のデンマークは、子供の時から親しんだアンデルセン物語語りで馴染み深い。美しい、親しみやすい町に、一際お美しい人魚の像、アンデルセンが子供を集めてお話を聞かせた公園と云い、如何にも美しい夢をもった、美しいお伽話が生れるにふさわしい町だった。久し振りに見る海、ただ北にある為中々寒く、話によるとモスコと緯度が同じとか。

名物のオープン・サンドイッチも多種類あり、長い長いメニューにも驚かされたが、サンドイッチと云ってもパンは下の方にあるだけで、鬼に角、私達の持っているサンドイッチの概念から離れた様な楽しいものだった。

スープも同じ様に多種あって、たっぷり入った入れものも、そのままおいて行って呉れるのが、又、嬉しいし気が持が良い。

東京で皮製品と云えば高いものと考えがちなのに、ここでは、サーピスのポレイさんの前掛が皮なもの珍らしく、始めて見た私は一寸驚いてしまった。

朝早く澄んだ空気の中に、郊外にある古城を見物に行く

と、朝の静けさにしっくりする様なおじさんが落葉をはいている姿が目映る。二、三人の子供が可愛らしいスキースタイルで遊んでいるのも北国の情緒をただよわせて印象的だった。

SASにてロンドンへ——  
ロンドンへ

空港のいかめしさを先づ感じて、今迄、通って来た国々と又違うものを感じる。霧のロンドン」と、スコットランド・ヤード」と頭の中に於けるロンドンと現実のロンドンは、戦勝国なのに何故か暗い。黒ずんだ建物に明るさを感じられないが、素晴らしいのはハイドパークの公園だった。東京の真中にこれ位の公園があったら何んかに楽しい事だろう。

服装も至って地味だし、お料理も、お菓子も大した事はなく、有名なジョニウオーカーすら店頭に見出す事が出来なかった。不思議に思っ過ぎてきて見た処が、殆んど輸出してしまい、国内は質素な地味な生活をしているらしい。

私がロンドンを訪れた時、丁度総選挙の開票日に当り、ピカデリーサーカス等の広場はゴツタ返していた。大勢の人が情勢如何にと広場の速報に見入って、色々と話合っている図は、日本も英国も何れの国も交りはないが、日本の選挙戦の様に、前日迄スピーカーが怒鳴り立てて騒しいという様な事は見られなかった。

若さの活気に溢れた近代国家と異り、落ちついた古い伝統に守られた王室の固らしい厳かさが、ロンドン塔にウエストミンスター寺院に、そして、大英博物館等に見出す事が出来る。

宮殿前では、赤い制服に金モール、そして黒い毛の高い帽子を被った玩具の兵隊さんの様な衛兵が、足音を揃えてピチツとまるで機械の様な正確さで衛兵交替を行う。何んかに見物人が居ようとも、何んかに廻りでしゃべろうとも、瞬き一つしない几張面な態度に、見物人の方がおしゃべりを止めて、うっとりで見入ってしまう。

パーミンガムまで汽車で、世界一のチョコレート工場「カイドバリ」を見学する。鉄道は工場に入り、学校あり、運動場あり、住宅あり、それ等が全てクエーカー教徒とかいうカイドバリでしめ、正に一国を作り上げているから大したもののである。経験の浅い私には日本の八幡製鉄しか思い出せないが、それがもっともと素晴らしいのだ。兎に角、広い広い工場に見学者も多く、器械、設備とも大規模なものであった。カカオ・ビンズからチョコレートそのもの映画を見せて呉れたが、製品の方は、チョコレートそのものはおいしかったが、センターものは余りおいしいとは云えなかった。

霧のロンドンも瞬く間に過ぎて、次の香港地待ちに待った花の都バリへ——